日本科学技術ジャーナリスト会議 会報 No.82
2017.3
Japanese Association of Science & Technology Journalists
JASTJ NEWS

フェイクニュース問題をどう考えるか

瀬川　至朗

昨年の米大統領選挙がきっかけで、フェイク（偽）ニュースという言葉が、にわかに注目されるようになった。選挙直後には「フェイクニュースがトランプ大統領を誕生させた」というメディア報道があった。一方で、就任後のトランプ大統領は「（政権に）ネガティブなニュースは、みなフェイクニュースだ」という姿勢をとり、トランプ政権に批判的なマスメディアを攻撃した。

フェイクニュースとは何か。英紙ガーディアン（2016年12月17日）は「読者をだまして流通量と収益を最大にするために完全に捏造された」ニュースだと定義した。ただし、使用法は混乱していて、一部に偽情報が入った場合や、悪意がない場合もフェイクニュースと呼ばれることがある。

「読者をだます虚偽情報」という点では、医療・健康情報の分野においては特に目新しいものではない。真偽が不確かな情報をもとにしたビジネスが、SNSの誕生前から長くはびこってきたからだ。2000年代初め、「健康食品」の科学的根拠について長期に取材調査をする機会があった。当時、がんの民間療法や食事療法は、人のデータがないままに奇跡的・画期的な効果を宣伝するものが多かった。患者は、信仰に近い形で、少しでも望みを感じる療法を信じ、高額の費用を支払っていた。

2017年の今日、状況はどうか。日々の医療ニュースやネット情報に接しての感想になるが、以前に比べて、夢の効果をうたうような商法はややおとなしくなったように思える。この間、健康食品の「バイブル本」が摘発された。また、オプジーボなどの新薬が開発され、がん医学が一歩進んだことも影響しているだろう。

ただ、昨年問題となった医療・健康系サイト「WELQ」などには、信頼性が確認されていない記事が量産され掲載されていた現実がある。医療・健康の世界では、フェイクニュースの類いは今も昔も手ごわい存在である。

フェイクニュース対策はどうすればいいのか。一つは、IT企業やメディアが連携して、悪質なフェイクニュースを早期発見できるチェックシステムを構築することである。もう一つは、主流のメディアが、ニュース提供者としての信頼性をさらに高めることである。米コロンビア大学ジャーナリズム大学院のM・シュドソン教授は、信頼できるニュース提供者の要件を次のように列挙している（コロンビア・ジャーナリズム・レビューに2017年2月23日掲載）。

①間違いが判明した時の記事取り下げや修正、お詫びに躊躇しない
②プロフェッショナル倫理の重視（正確さ／反証への関心／政治的意味よりストーリーに忠実）
③信頼できるジャーナリストとしての要件（物静か／論争的テーマでは多面的な視点を提示／可能な限り情報源を明示――など）

ジャーナリストは広い視野で根拠を追求し、かつ謙虚さ・誠実さが重要だということである。シンプルだが、「ポスト真実」の時代に必要なのは、真実に迫る姿勢である。　（JASTJ会員／早稲田大学教授）

CONTENTS

巻頭言……1
ニュース……2
　科学ジャーナリスト賞11作品が最終審査へ／第15期
　科学ジャーナリスト塾の修了式開催
見学会リポート　東京理科大学の数学体験館……4
例会報告（12月）“日本版NIH”はいま……5
例会報告（２月）オプジーボの光と影……6
会員だより　見えない宇宙を伝えるアルマ望遠鏡……7
オピニオン／WEB編集長から……8
事務局だより……10

科学ジャーナリスト賞一次審査開催 11作品を最終審査へ

2017年科学ジャーナリスト賞の一次審査会が３月４日に東京・神楽坂のJASTJ事務局で開かれた。昨年とほぼ同じ73作品（書籍38、映像25、新聞３、雑誌３、ウェブ・展示４）をJASTJ会員が審査し、その中から外部有識者を含めた最終審査会に送る11作品を選んだ。今年は映像作品が多く、作品数を絞り込むため活発な議論が行われた。

書籍では、JASTJ会員による評価が高かった上位３作品「クモの糸でバイオリン」、「ゲノム編集の衝撃」、「科学報道の真相」がまず議論の余地なく最終選考に残された。もう１、２作品を残すかどうかで議論した結果、原発事故で避難した人たちの苦しい状況をリポートした「リンゴが腐るまで」を選んだ。読売新聞の若手記者の作品で、新しい書き手を応援したいとの意味も込めた選考になった。映像作品では、竜巻研究で知られる気象学者の藤田哲也の業績を取り上げたNHKのドキュメンタリーと、沖縄にいまだ残る枯葉剤の残渣による環境汚染問題を取り上げた琉球朝日放送の番組に対し、一致して高い評価が集まった。

一次審査会では会員による書面評価の高かった候補作を中心に活発な議論を繰り広げた　（撮影　滝順一）

その他の候補作に関しては意見が分かれ議論になった。NHKスペシャル「被曝の森」と「原発メルトダウン 危機の88時間」、「天使か悪魔か 羽生善治 人工知能を探る」の３作品はいずれも優れた作品とする声があったものの、「被曝の森」が文化庁芸術祭テレビ・ドキュメンタリー部門で優秀賞を受賞するなどすでに他の賞を獲得している。JASTJとしてはまだ社会的に注目を集めていない優れた作品を発掘する狙いから、３作品を最終選考から外し、NHKスペシャル「がん治療革命が始まった～プレシジョン・メディシンの衝撃」と、日本テレビのドキュメンタリー「避難計画で

科学ジャーナリスト賞2017一次審査通過作品

＊新聞1点、書籍4点、雑誌1点、映像4点、企画展示1点

	作品名	代表者名	出版社名など	種類
1	連載「グレーゾーン　低線量被曝（ひばく）の影響」（2016/3/2～11/7、随時連載）	金崎由美ら取材班	中国新聞	新聞
2	クモの糸でバイオリン	大崎茂芳	岩波書店	書籍
3	ゲノム編集の衝撃―「神の領域」に迫るテクノロジー	松永道隆らNHK取材班	NHK出版	書籍
4	科学報道の真相～ジャーナリズムとマスメディア共同体	瀬川至朗	筑摩書房	書籍
5	リンゴが腐るまで～原発30km圏からの報告	笹子美奈子	角川書店	書籍
6	連載記事「オプジーボの光と影」（ロハス・メディカル2016年5、6、7、9、10、11月号～）	川口恭	ロハスメディア	雑誌
7	NHKドキュメンタリー・ブレイブ　勇敢なる者「Mr. トルネード～気象学で世界を救った男～」（2016/5/2、49分）	佐々木健一、丸山俊一ら	NHK	映像
8	NHKスペシャル「がん治療革命が始まった～プレシジョン・メディシンの衝撃」（2016/11/20、49分）	吉川美恵子、奥翔太郎、阿久津哲雄ら	NHK	映像
9	「枯れ葉剤を浴びた島2」～ドラム缶が語る終わらない戦争～(2016/4/25、53分)	島袋夏子	琉球朝日放送	映像
10	NNNドキュメント「3.11大震災シリーズ 避難計画で原発やめました　違いは何だ? ～伊方と米・ショアハム～」（2016/7/24、26分）	加藤就一ら	日本テレビ	映像
11	インターメディアテクの常設展示と「開かれた博物館」を目指す活動	西野嘉章	東京大学総合研究博物館、日本郵便	展示

●1次審査で審査対象になった作品は総計73点(内訳は書籍38、映像25、新聞3、雑誌3、WEB2、展示1、企画1)
●候補作の推薦と評価にはJASTJ会員ら37名が参加
●1次審査会は2017年3月4日午後2時よりJASTJ事務局で開催。小出、柴田、滝、横山、武部、林、佐々、中道、柏野、早野の10人（順不同）の会員が参加した。

原発やめました　違いは何だ？～伊方と米ショアハム」を選んだ。

地方紙の取材力に注目

新聞では、３つの候補のうち２作品の会員評価が高く拮抗していた。新潟日報の長期連載「原発は必要か」は、原発が稼働しなければ地域経済が疲弊するなどとする通説を東京電力の柏崎・刈羽原発周辺の地域経済の現況を詳しく調べて覆す試みで、地方紙の粘り強い取材力が注目された。ただこの作品もすでに「石橋湛山記念　早稲田ジャーナリズム大賞」を受賞している。このため会員評価の上でも少し高評価だった中国新聞の長期連載「グレーゾーン 低線量被曝の影響」を最終選考に残した。ここ数年、中央紙からの優れた作品がないことが残念だ。

雑誌では、月刊誌「ロハスメディカル」に連載中の「オプジーボの光と影」を選んだ。高額医薬品の問題から日本の薬価制度や臨床研究の課題に切り込んだ作品で、著者は元朝日新聞記者で医療・医学誌を自ら立ち上げ取材・執筆もこなしている。その活動全体を評価する意味合いも込められた。

最後に展示作品として、東京大学総合研究博物館などが運営するユニークな博物館「インターメディアテク」の活動を選んだ。　（JASTJ副会長　滝順一）

「海」をテーマにした第15期塾 賑わいの修了式

第15期の科学ジャーナリスト塾は2月15日に修了式を開いた。年度末の忙しい時期に16人の塾生のうち11人が出席、講師やアドバイザー７人も顔を見せたほか、新聞社に就職した昨年度の塾生も駆け付けてくれた。最終日に塾生の出席率が７割にもなったのは、過去の例と比べてかなり高い数字だ。「皆勤賞」の対象が2人。全員に葉書サイズの小さな「修了証」を授与したところ、大いに喜んでくれた。

「海」をテーマに、半年間に10回の演習と取材実習の機会として4回の見学会を実施。毎回の報告、見学記に加え、卒業原稿を書いた。複数の講師が塾生の面前で何度も赤字を入れて添削指導し、出来上がった作品はWEB編集長の漆原次郎さんが修了式に参加した塾生や講師の前で紹介した。

塾生は忍耐強く、よく励んでいた。塾を終えて年長者で皆勤賞を得たFさんは、「ライティング指導で当初は自身の文章が皆さんの前で添削される気恥ずかしさがあったが、回を重ねる毎にそれよりも『なるほど』『ああ、そうか』と納得できる指導が続いた。終わるのがおしい」と感想を寄せた。生物学専攻の大学院生Kさんは、「ライティングの機会を何度もいただけたことが貴重だった」と話し、塾がなければ出会えなかっただろう講師だけでなく、塾生として新聞社の記者

佐藤塾長から修了証を渡される塾生　（撮影　都丸亜希子）

2人が加わっていたことについても「プロに学ぶ機会になった」と話した。「JASTJで会員として引き続き書き続けたい」と言ってくれた塾生が複数いたこともうれしいことだった。

総括すると今期は、一人ひとりにとって身近で各自の視点が生きる「海」というテーマを掲げたことが大きな成果につながったと思う。また、自分の目で見て、耳で聞いて、という取材の基本となる見学会とライティング演習を重視したこと。さらに社会人や学生が混ざる学び。そして適度なアフター９の懇親会が大事だった。

最後に、こうした見学会をアレンジし、その案内、交渉に当たった柴田鉄治、瀧澤美奈子、保坂直紀の3氏をはじめ、見学会を受け入れくださった関係者、塾全体を支えてくれたアドバイザー、サポーターにあらためてお礼を申し上げます。　（塾長　佐藤年緒）

■第15期科学ジャーナリスト塾の特徴

統一テーマ	「海」
見学会・取材実習	南極観測船「しらせ」／海中ロボット(東京大学生産技術研究所研究室)／東京湾クルージング／海底広域研究船「かいめい」（海洋研究開発機構＝JAMSTEC）
成果発表	会報の記事執筆（見学会および月例会の報告）／JASTJホームページへの記事掲載（毎回の報告、見学会記事、最終個人テーマ）
運営	アドバイザーの協力（見学先との調整、講義、写真・インタビュー実習、添削）／サポーターの貢献（事務局運営、写真撮影、資料保存、原稿集めなど）／運営経費の本会計からの初の支出と寄付、交通費など支給

驚きと発見があふれる不思議な世界

東京理科大学　数学体験館

2016年12月21日、東京・神楽坂の東京理科大学「秋山仁の数学体験館」の見学会に参加した。3年前にオープンして以来、数学の好き嫌いを超えて子どもからシニアまで、多くの来館者に発見や驚きを与えてきた施設だ。25年前から秋山教授のもとでさまざまな展示物の設計・制作をしてきた広報担当の山口康之さんの案内で、12人のJASTJ会員が不思議な数学の世界へ足を踏み入れた。

ブタがバーベキューでハムに？

驚きは玄関ホールから始まった。長さ50cmほどの鉄棒に、ピンク色の小振りのメロン大の多面体が取り付けられた装置があった。バーベキューで肉をあぶり焼きにするグリル装置を模したもので、棒には回転用ハンドルもあった。多面体は正八面体の各頂点を切り落した立体（切頂八面体）で、三角形や台形の積み木のようなパーツを蝶番で組み合わせてある。表面にはブタのイラストが描かれていたが、ハンドルを動かすと各パーツがほぐれだし、１回転する間に内側に描かれていたハムのイラストが表面に現れ直方体に変形した。調理完了である。これは「表裏逆転変身立体」と呼ばれるもので、その性質をコミカルに表した作品だった。

次に案内されたのは、「視覚の魔術師」と呼ばれるオランダの画家エッシャーの作品で有名な平面充填図形。平面を同じ画像の繰り返しで隙間なく埋める絵画技法だ。正四面体をある特別なルールで切り開き１枚の平面図に。すると、誰でもエッシャーのような不思議な繰り返しデザインを作れるという。実演を見ていると、実際に手を動かしてみたくなった。

エッシャーの作品で有名な「不思議な繰り返しデザイン」の作り方を説明する山口さん。正四面体に４頂点すべてを通るように切り込みを入れて平面にし、同じ形を複数作ると平面に隙間なく並べることができるという。

展示の中でも特に興味深かったのは、最短経路を求める実験。２枚のアクリル板を１cmほどの隙間を開けて平行になるようセット、その隙間に複数のピンが打ってある。これを石鹸水に沈め、ゆっくり引き上げると、すべてのピン（点）を最短距離で結んだ経路が石鹸膜となって現れる。石鹸水の表面張力が持つ「表面積を最小化する」性質によるものだ。点が４個、５個と増えてくると、直感的に想像したのとは違う形が現れる。鮮やかな解法は魔法のようだった。

予定していた１時間半はあっという間に過ぎたが、それでも見学できたのは展示の半分にも達しなかった。数学体験館は祝日を除き水～日曜日まで、いつでも無料で見学可能というので、もう一度足を運んでじっくり見たいと思った。

収穫多かった忘年会

この後、近くのイタリア料理店に会場を変え、山口さんや賛助会員の参加も得て総勢22人で忘年会を開いた。美味しい料理やワインのせいか、「人はなぜ生きる意味を求めるのか」「宇宙の始まりって？」「平和とは？」など、日常とは違う話題で議論できたのも収穫だった。　（塾生　高山由香）

「表裏逆転変身立体」の実演。ハンドルを一回させるとピンク色の可愛いブタがハムに変身。変身の前後で、全く異なるデザイン（ブタ：ピンク色、ハム：茶色）が描かれていることで、構成するパーツの異なる面が表に出ていることがわかる。

二項分布パチンコ。丸い木製の玉が「パスカルの三角形」状に積み上がる様子に思わず声が漏れる。誤差に関する説明もあり、理系の大人でも満足できる実験だった。

忘年会はイタリア料理で。参加者たちの尽きない情熱は、乾杯とともに友好の輪を広げていった。
（撮影　いずれも高山由香）

研究開発の縦割解消に挑戦

末松誠・日本医療研究開発機構（AMED）理事長に聞く

2016年12月15日に東京理科大学理数体験館会議室で開いた月例会は、設立から１年半たった日本医療研究開発機構（AMED）の末松誠理事長を招いて話を聞いた。医療研究開発の強力な推進役として世界をリードする米国立衛生研究所（NIH）に負けない組織作りを目指し、設立当初“日本版NIH”とも呼ばれた同機構の現状と課題、今後の展望について、末松さんは率直に語ってくれた。

15年４月、政府は医療研究開発の基礎研究から実用化までを有効につなげることを目標にAMEDを設立した。その中で、慶応義塾大学医学部の医師であり生化学者であった末松さんはAMED初代理事長への大転身を経験することになった。

ただ、AMEDの現状は、予算がNIHの20分の１で、バックアップするベンチャー企業も日本にはほとんどない。27の研究所からなる本家とは規模だけでなく、仕組みも全く異なっている。末松さんは「当初の日本版NIHという表現には違和感がある。NIHだけがうまくいっているわけではなく、日米共通の課題も多い。一方、AMEDだからできる取り組みもあり、着実に成果はあがっている」と力強く切り出した。

公平な研究費配分と有効活用を制度化

AMEDは文部科学省、厚生労働省、経済産業省等からの出向者が３割、全国の大学や研究機関、企業などからの研究者が７割という割合で構成され、11の部で成り立っている。年間予算は約1400億円で、国の他の研究機関に割り当てられる医療研究予算の２倍に相当する。文科、厚労、経産の各省が５：４：１の割合で負担、出向者数も同じ比率だ。まさに縦割り構造だが、11の各部には３省からの出向者が渾然一体で所属し、末松さんの提案に時にはブーイングが起きるほど自由に議論できる環境だという。

動き出した“日本版NIH”の取り組みに聞き入る参加者たち（撮影　いずれも佐藤年緒）

AMEDに課せられた役割を果たすためにまず着手したのは、研究費の公平な配分と有効活用。全国の研究者が提案した研究テーマのうち厳しい審査で約20％だけを採択、現状では約2,200課題の基礎研究、臨床研究、橋渡し研究が走っている。

末松誠理事長

研究費の有効活用のために年度を超えて予算が使える「年度またぎ」や、国の予算と民間予算の併用も制度化。また、機器の購入や旅費等の支払いにおける他の研究費との合算使用や、研究機器を他の研究と共同利用することも可能とした。「この仕組みを活用する大学や研究者は増えつつあり、他の国の研究費にもこの仕組みを導入していってほしい」と末松さんは強調した。

医療情報の共有で難病に挑む

代表的な成果の一つに、診断のつかない患者の情報を共有し、原因究明、治療法開発を目指す「未診断疾患イニシアティブ（IRUD）」がある。IURDは医療情報におけるデータシェアリングのモデルの役割も担っている。

「希少難病の患者さんを抱えている医師はそのデータを囲い込みたがるものだが、交流すると同じ病気かもしれない患者が見つかり、研究がぐっと進むことがある」と末松さんは語る。IRUDでは現在34の拠点病院を含む200以上の医療機関が連携し、2,000家系以上の症例が登録された。発症年齢などの様々な患者情報もデータベース化して効果的な診断に活用されており、すでに７つ以上の新規原因遺伝子が解明された。

「治療できなくても病気の原因を家族に伝えられる意義は大きい。5,000-6,000以上あるといわれる未診断のままの病気の登録も進めていきたい」と末松さんは締めくくった。

AMEDは健闘しているものの、抱える課題も多い。しかし、末松さんはその将来を「楽観している」と言う。その根底には、取り組みの中で育成されていく各人の能力を信頼する「性善説」があるのだろう。AMEDは組織も人も成長中と受け止められた。

（JASTJ理事　佐々義子）

高額医薬品「オプジーボ」の光と影

『ロハス・メディカル』の川口恭さんに聞く

切除できないがんも治せる画期的な新薬が登場した。小野薬品工業が開発した「オプジーボ」。高い治療効果が注目される一方、あまりにも高価なことで一躍有名になった薬だ。2月6日に開催した例会では、医療情報誌『ロハス・メディカル』の川口恭・編集発行人を招き、「オプジーボの光と影？ 高額医薬品を社会はどこまで許容できるか」をテーマに話を聞いた。患者の医療不信の緩和・防止と医療者への信頼向上を目標に発行している同誌は、現在このオプジーボ問題について集中連載中だ。

「患者のため」は誰のため？

「患者のための医療が、結果として若年層からお金を吸い上げて高齢者に払うことになってしまう」――。川口さんは、高額医薬品がもたらす影響についてこう問題点を指摘した。

オプジーボは人間の体にあらかじめ備わっている免疫機能を利用し、がん細胞を除去する。手術との併用ではなく薬剤単体で非常に高い効果を発揮するため、手術できない部位のがんや、転移したがんに対しても有力な対抗手段になる。患者にとっては救いをもたらす薬だ。

しかし、患者一人がオプジーボの治療を受けるには年間およそ1750万円が必要。その薬価の大部分は医療保険でまかなわれるため、オプジーボの使用は保険料の増加につながる。がんは高齢者ほど発症しやすいため、オプジーボによる治療で膨らむ保険料の支払いは主に若者たちが背負うことになる。

高額医薬品の現状と将来をどう考えるべきかについて活発な質疑も

オプジーボの薬価は当初、年間3500万円だった。しかし、2017年2月から半額に値下げされ、現在の薬価となった。当初は18年4月に薬価見直しが予定されていたが、保険料増への懸念から異例の緊急値下げだった。

講演する川口恭さん
（撮影　いずれも西野博喜）

医療費に費用対効果の観点を

医療保険の継続性を担保し、今の若者たちが主な受益者となるためには何が必要なのだろうか。「医療費の値付けを見直すべきだ」というのが川口さんの答えだ。

現在、薬の価格は「原価の総額を投与予定量で割る」方式で定めている。研究開発費が多になるほど、また治療対象となる疾患の患者が少ないほど、薬価は跳ね上がる仕組みだ。これに対し、川口さんが主張するのは「費用対効果」方式。何年寿命を延ばせるならいくら、といった形だ。これなら異常に高い薬価にはならない。「患者のため」となんでもするのではなく、治療にかかる費用と効果をできるだけ正確に評価することが、高額医薬品の使用を抑制し保険料を抑える手段だという。

参加者からは「英国では1990年代から費用対効果の評価を取り入れている。日本でこれまで取り入れてこなかったのは、その余裕がない、あるいは成果が望めないからではないか」との質問も出た。これに対し、川口さんは「治療や薬剤について、分野ごとに大幅な見直しをすれば一定の成果が出る」という。たとえば、多くの高齢者に処方されている生活習慣病の薬も、大病につながるおそれがあるなど、本当に必要なケースに限って処方すれば、保険料を効果的に抑えられるという。

日本では、医療を費用対効果で値付けすることには国民の間に抵抗があるのも現実だ。しかし、川口さんの話を聞いて、医療保険が将来にわたって価値あるものであり続けるためには、小手先でない改革が必要だとも感じた。　（塾生　菊池結貴子）

目に見えない宇宙を伝える

アルマ望遠鏡の広報活動にかける想い

「惑星はどのように誕生するのか」「生命の材料になる物質は宇宙にあるのか」――。こんな謎に挑もうとしているのが、日本を含む22の国と地域が共同で南米チリに建設したアルマ望遠鏡です。私はこのアルマ望遠鏡の広報担当として、その成果や意義についてメディアなどを通じて広く一般に向けて発信することを仕事にしています。

アルマ望遠鏡が撮影したおうし座HL星の塵円盤
＝Credit: ALMA (ESO/NAOJ/NRAO)

見えない宇宙を電波で探る

アルマ望遠鏡は、宇宙からやってくる電波を観測する「電波望遠鏡」です。といっても宇宙人からの電波を探すわけではなく、星々の間に漂う低温のガスや塵から自然に出てくる電波を捉えます。ガスや塵は星や惑星の材料であるため、その量や性質を調べることは、星や惑星の形成過程の謎に迫る上で重要な手がかりになります。

望遠鏡は、口径を大きくすればするほど解像度と感度が向上します。アルマ望遠鏡では66台のパラボラアンテナを最大で16kmの範囲に展開し、すべての信号を結合させることで全体を一つの巨大な望遠鏡として機能させます。山手線大の巨大な望遠鏡で得られる解像度は「視力6000」。東京から大阪に落ちている1円玉の大きさが見分けられる能力に匹敵します。ほかの望遠鏡の数十倍から100倍もの性能を武器に、アルマ望遠鏡は今まさに天文学の世界を変えつつあります。

アルマ望遠鏡の代表的観測成果は、生まれて100万年の若い星「おうし座HL星」を取り巻く塵の円盤を高解像度で捉えた画像です。多くの天文学者が、まるで現場で見てきたかのような多重リング模様に度肝を抜かれ、天文学に新しい時代が到来したことを実感しました。そしてこの画像の解釈、つまり多重リングの成因について、活発な議論が巻き起こりました。まさに百聞は一見にしかず。それまで見えなかったものが見えたことで解決する謎もあれば、生まれる謎もあるのです。

2013年に本格運用を開始したアルマ望遠鏡のアンテナ群
＝Credit: ALMA (ESO/NAOJ/NRAO)

ダイナミックな天文学を共有する

これほどまでに強力に天文学をけん引するアルマ望遠鏡プロジェクトの広報活動を担うという業務は、大変やりがいがあります。もちろん、チリという遠隔地で、電波天文学という耳慣れない手段で宇宙を手探りしている姿を伝えることには困難もあります。

おうし座HL星の画像も、研究者なら何年もご飯が食べられる画像ですが、道行く人に見せても共感が得られるかどうかは疑問です。それでも、先に述べたようにダイナミックに書き変わっていく天文学の「今」を何とか多くの方と共有したい、という想いで日々業務にあたっています。

新発見の面白さを直球勝負で伝えることのほかにも、アルマを支える技術や人の魅力、標高5000mの砂漠という場所の魅力、国際協力の意義など、さまざまな切り口を織り交ぜることによって幅広い層にアプローチすることも目指しています。

天文学関係の成果発表といえば米航空宇宙局（NASA）が大々的にやりますが、研究者コミュニティーでは「実際の成果と比べていつも煽りすぎでは？」という不信感も芽生えつつあります。正確さとわかりやすさのせめぎあいは、常日頃から多くの方が直面している問題ではありますが、真摯に、かつ魅力的に、現在進行形の科学の姿を共有するために今後も尽力したいと思います。

（JASTJ会員／国立天文台チリ観測所　平松正顕）

オピニオン

防災・減災は日本から発信を

東日本大震災の直後にJASTJの仲間と被災地を回り、コンクリートの防潮堤がひっくりかえり、海岸の松林がなぎ倒されている光景を目にした。以来、「被災地の復興とは何か、被災者の希望とは何か」という、科学の範疇を超えた問いに向き合っている。

一昨年ソウルで開かれた科学ジャーナリスト世界会議で、欧米の科学誌編集者たちに、コンクリート護岸だけに頼らずに、植林による防潮堤の建設に取り組む宮城県岩沼市の事例などを伝えようとしたが、「科学的でない」とそっけなかった。自分の英語力の問題もあった。リベンジの意を込めて、昨年12月にタイの古都ランパーンで開かれた「アジア文化景観学会」のシンポの場で伝えようと、JASTJの優秀な英語の使い手に手伝ってもらい、「災害復興における樹木の役割」について文章をまとめて提出したところ発表の機会を得た。

タイで発表した宮城県岩沼市での植樹による減災活動（撮影　佐藤年緒）

参加者は韓国、中国、インド、フィリピン、インドネシア、タイ、カナダと文字通りアジア中心。日本からは私一人と心細かったが、写真を中心にしたスライドを使い拙い英語でなんとか伝えた。その土地の文化を生かした景観を遺産に残すという趣旨のシンポだったが、どう受け止められただろうか。また失敗と思ったが、発表後に国際自然保護連盟（IUCN）タイ支部の代表者から、自然を生かした防災・減災の取り組みは、タイでもマングローブの植林に生かせるので詳しく教えてほしい、専門家も教えてしてほしいと要望された。

思いがけなく、日本とタイとの橋渡しに一役買いそうだ。2年前に比べ、聴いてくれた人がアジア人だからなのか、英語の問題かは分からない。ただ、少なくとも地震・津波への防災は日本が世界に発信できるテーマであること、そして現場取材や海外への発信のうえでJASTJに仲間がいる恩恵をあらためて噛みしめた。世界に大いに発信しよう。

（JASTJ理事　佐藤年緒）

WEB編集長から

JASTJのホームページをご覧いただきありがとうございます。2016年12月から17年2月のJASTJホームページ関連のできごとなどを紹介します。

■15期塾生の最終作品掲載

この会報でも関連記事があるとおり、第15期科学ジャーナリスト塾の最終回を迎えるにあたり、塾生たちが「海」を題材として取り組んだ「最終作品」をホームページに掲載しました。塾のページ内、「第15期塾生による最終作品」をクリックするとご覧いただけます。

記事のテーマは、海底地形探査、ウナギ減少、サメの本当の姿、海の住民たち、地震研究のための海洋調査、海中ロボット、水族館、森と海の関係、サンゴ礁の危機、完全養殖クロマグロ、古くからの暮らしと、多岐にわたっています。着眼点や切り口も、日頃から感じていることや、塾の見学会の取材で思ったこと、また、職への意識から伝えたいことなど、じつにさまざまです。

■メディアとともに書き方も多様化

「記事」というと、かつては紙媒体の記事が書き方のお手本として、強く意識されていた気がします。いまは職業記者だけでなく、だれもが伝えたいことをインターネットなどの媒体で発信できる時代。日本語として読者が読める文であることはもちろん必要ですが、「伝えたいこと」を伝えるための書き方は多様化してきたと感じます。

塾生たちの記事にも、新聞記事をモデルにしたと思えるものもあれば、そうではないものもあります。これも時代を反映したものといえるかもしれません。

塾のページでは最終作品のほか、塾生に執筆を、またサポーターに撮影をしていただいた各回の報告記事も掲載を重ねました。みなさんがこの会報をご覧になっているころには、全回分が掲載されていると思います。

（Web編集長 漆原次郎）

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

（50音順、2017年3月現在）

	一般財団法人　新技術振興渡辺記念会
味の素株式会社	宝ホールディングス株式会社
鷗友学園女子中学高等学校	株式会社東芝
花王株式会社	ノートルダム清心女子大学　情報理学研究所
国立研究開発法人 科学技術振興機構	株式会社日立製作所
カクタス・コミュニケーションズ株式会社	豊清工業株式会社
株式会社構造計画研究所	ロート製薬株式会社
サントリーホールディングス株式会社	AE 海老名・綾瀬法律事務所

■ 新入会員の自己紹介

● **奥西 亮太**（毎日放送　報道局ニュースセンター）

私は修士課程まで分子細胞生物学で神経の研究をし、副専攻として文科省のSciREX（科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業）が主催するプログラムを受講、第一期の修了生にあたります。2014年に毎日放送に入社して昨年６月に報道局に異動、科学・医療分野を担当しています。

■ お知らせ

福島原発事故「なんでも検証委員会」再開へ

21世紀を代表する重大事故となった福島第一原発の３連続爆発から丸６年、各地では何事もなかったかのように原発再稼働に向けた準備が進んでいます。しかしこの事故をめぐっては、今も多くのナゾが未解明なままです。これらの問題点や事故後６年経って明らかになったことなどを議論するために、JASTJが事故直後に立ち上げた「なんでも検証委員会」を再開するので、会員の積極的な参加を呼びかけます。

福島第一原発事故の影響で今なお約８万人が故郷に帰れず、原発関連死者数は2000人を超え、自殺率も増えました。事故後間もなく、政府・国会・民間・東電がそれぞれ事故調査委員会を立ち上げ、報告書を発表しました。JASTJはこれらの報告書の内容を検証するために「なんでも検証委員会」を立ち上げ、『４つの“原発事故調”を比較･検証する～福島原発事故13のなぜ～』と『徹底検証！福島原発事故 何が問題だったのか』の２冊の本にまとめ発行しました。

このときの執筆者は延べ19人、本の帯には「真相を闇に葬らないために」と記しましたが、事故原因は地震か津波かといった基本的な点に関しても確定的な結論に至らぬまま今に至っています。多数の課題を残したまま再稼働が着々と進行、原発事故は風化し始めているのが現状です。

そこでいま一度、「なんでも検証委員会」を立ち上げて、福島原発事故のその後を含めて検証したいと考えています。柴田理事を始め、高木、横山、飯島、隈本、西野各理事らの参加の内諾も得ていますが、広く会員にも参加も呼びかけたい。会議日時などが決まれば改めてメールなどで告知します 。

（JASTJ理事　林勝彦）

会員の BOOKS　新刊紹介

科学者18人にお尋ねします。宇宙には、だれかいますか？

縣秀彦 編集、佐藤勝彦 監修　（河出書房新社・税込1620円・2017年2月）

アストロバイオロジー（宇宙生命学）の研究最前線で活躍する国内外の研究者18人へのインタビュー集。地球外「知的」生命体について第一線の研究者が論じ合うのは、初めての試みではではないか。そればかりか、研究者の頭の中にある知的生命体の姿を研究者自身がイラストで書き下ろしているのは興味深い。その多様なイマジネーションの世界には脱帽するばかりだ。想像が創造を生み、科学がスパイスを与える世界が読者の目の前に広がる。　（会員　縣秀彦）

科学報道の真相――ジャーナリズムとマスメディア共同体

瀬川至朗著（ちくま新書・税込み950円・2017年１月）

なぜマスメディアの報道に市民は不信感を持つのか。そうした問題意識のもと、STAP細胞、福島第一原発事故、地球温暖化という近年の科学報道の事例検証に取り組んだ。それぞれ異なる視点で分析をしたが、結果として「権威に頼った発表報道」という共通した問題が見えてきたのは筆者自身、意外だった。本書の後半では、科学記者が所属するマスメディアの内部構造に立ち入り、社内の権力構造や、記者と取材対象者のカップリングの問題などを考察した。本のタイトルは硬めだが、読みやすいように構成などを工夫した。一気に読めるはずです。　（会員　瀬川至朗）

編集後記

▶会報は年4回発行しているが、この3カ月で世界が大きく変わってしまったのではないかと感じる。その最大の要因はトランプ大統領の登場だ。オルタナティブ・ファクトと称してフェイクニュースを意図的に流し、真実を覆い隠すことを恬として恥じない。タガが外れたような恐ろしさを感じる。
▶連日報道される森友学園問題やテロ等準備罪法案に関する政府の国会答弁にも同様のにおいがする。戦前日本が、国民が明確に意識しないまま軍国主義の道に踏み込んだのはあっという間だった。瀬川氏の巻頭言を読んで様々なことに想いを巡らされた。（靭）

編集・発行

日本科学技術ジャーナリスト会議
Japanese Association of Science & Technology Journalists (JASTJ)

〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3 東京理科大学1号館13階
電話：070-1448-8800　Email：hello@jastj.jp
会　長／小出重幸　事務局長／藤田貢崇
編集長／高木靭生

ホームページ http://www.jastj.jp